

ブラジルにおける沖縄移民と宗教-文化人類学的研究-

著者	森 幸一
号	185
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14559

もり
森

こう
幸

いち
一

学位の種類 博士（文 学）
学位記番号 文 第 185 号
学位授与年月日 平成14年 2 月21日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 ブラジルにおける沖縄移民と宗教
——文化人類学的研究——

論文審査委員 （主査）

教 授 嶋 陸奥彦 教 授 大 橋 英 寿
教 授 鈴 木 岩 弓

論文内容の要旨

本研究は、ブラジルの日系人口の約 1 割（14万人程度）を占める沖縄県出身移民とその子孫たちの歴史的経験を詳述するとともに、特に、沖縄系社会において活動する沖縄系シャーマン〈ユタ〉の生成とその呪術宗教的世界を、沖縄系人のエスニシティとエスニック文化の創造過程という視点から民族誌的に記述、考察することをめざすものである。

従来、ブラジルにおける沖縄系人の経験は「日本人移民」「日系ブラジル人」という範疇に括られて叙述されることを常としてきた。勿論、沖縄系人も日本人・日系人として共通した経験をもつ主体であるが、他方、日本という国家の中での、沖縄／沖縄人の位置や意味づけ、本土系日系人との相互行為のあり方などとも絡み合って、本土系日系人とは異なる社会的世界や文化を構築してきた主体でもあった。こうしたユニークさは、これまでの研究の中では、「日本人移民」「日系人」と括られることで封じ込められてきたのである。筆者は、ブラジルにおける沖縄系人の経験を救出することは日系エスニック・マイノリティ社会の「構造」をより深く理解する上で重要性をもっているばかりではなく、日本という国民国家における沖縄・沖縄人の位置や意味を批判的に捉え直す契機となるものと確信するものである。

本研究は10の章と1つの補論を通じて、上記の課題にアプローチした。

第1章「課題と方法」では、まず、これまで行われてきたエスニシティとエスニック文化に関する研究史を振り返りながら、本研究の基本的視角を提示した。本研究においては、エスニシティを少数マイノリティ（個人・集団）が国民国家の国民観、主流〔基層〕文化観などを観

照しながら、自己や自集団を「出自を通じて獲得した」と認識する文化要素（伝統・習慣・慣行などの文化）を選択、操作し、そこに「他者との差異」を保証しつつ、過去との連続性を造り上げ、新しい意味を付与することを通じて、新たな主体やアイデンティティを構築するプロセスと捉えた。そして、エスニック文化とは、この過程で選択された文化要素を志向的に操作することを通じて、それに新しい意味や機能を付与し、その主体やアイデンティティを表象するために、新たに創造されたものであると規定した。第1章の後半部分では、本研究の具体的課題を提示するとともに、本研究のデータ収集法（参与観察法、面接法、調査票調査、文献・文書資料収集）を示した。

第2章「ブラジルの宗教状況－ブラジル・アイデンティティとの関連において－」では、沖縄系人の宗教生活や〈ユタ〉生成を規制する基底的条件である、ブラジル社会の宗教状況や国民観、基層文化観とその変化の様相を詳述した。この章での記述から、筆者はブラジルの宗教状況を、①カトリシズムをドミナントな存在としたが、そのカトリシズムは経典的ローマカトリシズムではなく、呪術的性格を持つ聖人信仰を中核とする民衆カトリシズム（Folk Catolicismo）であったこと、②ブラジルの少数マイノリティ（インディオ、黒人）は植民地時代から独立以降も、主流社会の宗教（特に民衆カトリシズム）を枠組としながらも、そこにそれぞれの宗教伝統を導入し、シンクレティックな宗教・カルトを創造し、自らのアイデンティティを表明するという戦術を取ってきたこと、③19世紀以降、フランスからのKardecismo思想の導入を中心に、ヨーロッパから多くの神秘主義思想や心霊主義思想が移入され、特に都市部において呪術の様相を強くもつ大衆の宗教的エトスが醸成されてきたこと、④多宗教的状况が出現（換言すればカトリシズム・ヘゲモニーの終焉）し、カトリシズムに依存しない宗教的ナショナル・アイデンティティの構築が可能となっていること、と整理した。そして、以上のような特徴が〈憑依〉に対する信仰を基礎とする沖縄ユタ・シャーマニズムと親和的な文化的基盤となっていることを指摘するとともに、シャーマニズム自体のオープン的特質とも交錯しながら、ユタとなる個人が聖人信仰を中核とする民衆カトリシズムを、その呪術宗教的世界に導入することを可能とした点などを指摘した。

第3章「ブラジルにおける日系人の宗教生活と日系宗教」では、第2章とともに〈ユタ〉生成にとっての背景となる日系社会の宗教状況の変化を、日系人が析出した生活Strategyの変化に着目して、四つの時代に－コロノ時代（短期的出稼ぎStrategy期）、植民地時代（中・長期的出稼ぎStrategy期）、離村向都時代（永住Strategyの析出期）、都市時代（永住Strategyに伴う生活の再編期）－区分し、詳述した。そして、戦後期、ブラジルへの永住Strategyの析出と随伴したかたちで、「日本宗教」が日系人間に広く、深く受容されたこと、「日本宗教」の再生は、第一に日本から進出を遂げた新宗教教団・宗派（特に生長の家、世界救世教、PL教団など）の受容、第二に日系人による〈ブラジル産日系新宗教〉の創造という二つの方向で展開されたことなどを指摘した。こうした「日本宗教」は、永住Strategyに加えて、ブラジルの〈国造りの論理〉が同化主義的イデオロギーから多文化主義的イデオロギーに変化したことなどに関連して析出された、新しいエスニシティを表象する文化要素であったことを指摘した。さらに、日系人間に受容されていった、日本からの新宗教にしろ、日系人によって創造された日系新宗教にしろ、それらはシンクレティック性を基盤としていたことによって、「ブラジルに居住す

るニホンジン」「ブラジル生まれの二世」というアイデンティティのシンボルとなりえたのであろう点を示唆した。

こうした動きは基本的に沖縄系人でも同様なものであったが、特に1970年代以降、沖縄系人のあいだで、スティグマを伴わない新たな文化的アイデンティティが構築されるに伴い、宗教的領域においても、自らの〈固有の宗教〉あるいは〈伝統〉とされる祖先崇拜が重要な意味と位置を与えられるとともに、祖先崇拜を中心的な職掌とするユタ的霊能者が出現するようになった。

第4章「沖縄県移民・アイデンティティ・祖先崇拜」では、沖縄県出身移民のブラジルにおける歴史的体験、アイデンティティの変遷、祖先崇拜を巡る状況の変化を詳述した。本章では、まずブラジルにおける沖縄系人の歴史的経験を概観し、その後に、戦前・戦後を問わず、本土系移民との相互的差別意識、強固な同郷・親族関係の存在などの要因から、本土系移民とは異質な地域に独自の同質的共同体を形成する動きが強固であったことなどを指摘し、このコミュニティが1950年代以降、ブラジルの〈ヤー（イエ）〉とともに沖縄系エスニック文化創造の一つの〈場〉となったこと、などを指摘した。アイデンティティの変遷に関しては、集合的沖縄系人のアイデンティティの変化を、「日本人となる」－〈県人〉アイデンティティ、「ブラジルの日本人となる」－〈コロニア人〉〈二世〉アイデンティティ、「ブラジルの沖縄人となる」－〈ウチナーンチュ〉アイデンティティとに時代的に区分し、主に言説のレベルで、それぞれのアイデンティティ構築の過程を解釈した。そして、1970年代に、本土系日系人との関係性のあり方の変化（明示的な差別の消滅）、沖縄系人の経済的成功と社会的参加の活発化、ブラジル社会における同化主義イデオロギーの脆弱化、さらには沖縄や日本本土、米国などにおける沖縄固有文化（特に琉球芸能文化）の見直し運動の影響などが加わり、「沖縄人であること」のマイナスティグマが払拭されて立ち上げられた〈ウチナーンチュ〉アイデンティティのシンボルのひとつとして〈祖先崇拜〉を中心とする沖縄的習俗が選択されるようになったことを指摘した。そして、第4章の最後の部分では、沖縄系人の祖先崇拜実践を巡る諸条件の変化に関して考察を加え、その諸条件の変化が祖先崇拜を職掌の中心とするユタ的霊能者誕生の背景となったことを指摘した。

第5章「沖縄系人の宗教行動－サンパウロ市Vila Carrao地区での調査－」では、サンパウロ市Vila Carrao地区に形成された沖縄系コミュニティで実施した沖縄系人家庭における祖先崇拜、沖縄的習俗、ユタやウガンサーなどへの依存状況などに関する調査結果が提示された。このサンパウロ市内の沖縄系エスニック・コミュニティの生成過程に関しては、特に経済的適応Strategyとその変遷を視点として、補論「サンパウロ市における沖縄系エスニック・コミュニティの生成過程－特に経済適応ストラテジーとの関連において－」で詳述した。

調査結果は、①沖縄の〈固有宗教〉と観念される祖先崇拜に対する沖縄系人の親和性は非常に高く、しかも祖先崇拜のシンボルである位牌（仏壇）とヒヌカン（火の神）の保有率はそれぞれ90%、88%であり、これらを保有する世帯では95%以上が何らかの儀礼を実施している、②祖先崇拜との親和性が高い一方で、祖先崇拜とカトリック信仰、生長の家、創価学会などの日系新宗教の信仰などが二重に実施されている家庭も多く見られた。注目されたのはこの信仰の二重性を、沖縄の祖先崇拜を〈ヤーの宗教〉〈沖縄の習慣〉、その他の宗教を〈個人の宗教〉

〈ブラジル人としての宗教(カトリック教徒の場合)〉と位置付けている点で、沖縄性と日本性、ブラジル性とが宗教的に整序されている、③ユタ的霊能者やウガンサー(拝み人)への依存が非常に高く、それぞれ59%、68%の世帯が何らかのかたちで依存していた。これは日本の沖縄社会における依存率と大差のないものとなっている。ユタ的霊能者への依存内容は多岐に及んでいるが、その主要なものは運勢や計画の吉凶の判断、先祖祭祀を中心とする儀礼・呪法の執行依頼、沖縄的な供養のやり方の教示、異常体験の解釈、先祖の意向の確認などとなっている、④沖縄系人の宗教行動で特徴的なのは、ユタ的霊能者に依存する一方で、ブラジルの霊能者Curandeiroへの依存もかなりの程度で行われていることである。これまでにCurandeiroに依存したことがある者の比率は24%であった。Curandeiroへの依存状況を整理してみると、ユタ的霊能者が生まれる以前に、ユタへ持ち込む問題の解決を期待しての依存と、ユタ的霊能者誕生後に、沖縄系人の不幸、悩みなどの原因として沖縄的なモノとブラジルのモノに整序し、前者はユタ的霊能者へ、後者はCurandeiroへ持ち込むという二重の災因論、対処法に基づいた依存とに区別することができる、と整理できる。

第6章「ユタ的霊能者の成巫過程の類型化」では、ブラジルのユタ的霊能者9名が〈ユタ〉となっていく成巫過程及び呪術宗教的世界の特徴から、ユタ的霊能者の類型化を試みた。まず、ユタ的霊能者の成巫過程について、大橋[1998]のユタ成巫過程のモデル図式に沿って、9名のユタ的霊能者の成巫過程の一般的な特徴を記述、検討した。その結果、ユタ的霊能者の成巫過程は、ブラジルの沖縄系エスニック社会の中で〈ユタ〉化するという共通性を持つものの、時代的にかなりの多様性を示していた。そして、この多様性がいかなる要因から発生しているのかを検討した。

この検討に続いて、ブラジルの沖縄社会の中で〈ユタ〉と認知されていない1名を除いた8名のユタ的霊能者を、成巫過程において準拠した宗教伝統と他の宗教との関係性を主な指標として類型化を行った。まず、成巫過程で準拠したのがブラジルの宗教伝統=Umbandaの枠組か、沖縄シャーマニズムの枠組かによって大別し、前者を〈ブラジル型〉、後者を〈沖縄型〉と名付けた。

一方、沖縄シャーマニズムの枠組に沿って〈ユタ〉化した事例=沖縄型は他の宗教・信仰との関連において、二つのタイプに区分した。第一のタイプは他の宗教・信仰をその宗教世界から可能な限り排除し、沖縄のユタ・シャーマニズムの様式に固執、あるいはそれを志向するものである。第二のタイプは、それぞれのユタ的霊能者の宗教遍歴の結果、それらの宗教・信仰の要素を沖縄シャーマニズムに基づく自己の宗教世界に積極的に導入する志向性をもったものである。本研究では、前者を〈伝統志向型〉、後者を〈融合志向型〉と名付けた。そして、この三タイプは、ブラジル型と沖縄型=融合志向型が、世代的には二世ないし子供移民(準二世=子供時代に移住した者)を主体としているのに対して、伝統志向型は、成人後にブラジルに移住した一世移民を中心としており、主体のアイデンティティと鋭く交錯している可能性を示唆した。

また、全てのユタ的霊能者のユタ化過程及びその呪術宗教的世界は、ブラジルという国家の枠組に規制されているという共通性が存在していることを指摘し、〈ユタ〉となる営為を〈エスニック〉ユタとなる過程と捉え、そのエスニック化のプロセスを詳述した。エスニック化は二つの方向、即ち、ブラジルの憑依宗教Umbandaのエスニック化と沖縄シャーマニズムのエス

ニック化という方向性をもっていることを指摘し、その内容を詳述した。また、エスニック化の過程において創造された呪術宗教的世界の特徴に関しては、第6章においても簡単に記述してあるが、第8章、第9章において詳述した。

第7章「ブラジルで〈ユタ〉になる－成巫過程の事例研究－」においては、9名のユタ的霊能者の生活史（ユタ化過程を中心にした）を詳述した。ユタ的霊能者の成巫過程は、自らの人生や心理状態をシャーマニズムのイディオムによって意味あるかたちに整序しながら、自らの自己観を統合しなおし、最終的に〈ユタ〉としてのアイデンティティや新しい自己観を獲得し、新たな役割を遂行するようになるプロセスであり、換言すれば〈個性化のプロセス〉でもある。この〈個性化のプロセス〉を、第7章では、成巫過程で生成されるチヂ・憑依霊を〈パーソナル・シンボル〉と捉え、それぞれのユタ的霊能者が、Umbandaないし濃淡はあるものの沖縄シャーマニズムという文化的パラダイムに準拠しながらも、その特質であるオープン性（憑依霊やカミは名付けられた存在ではない）・柔軟性を利用しながら、それぞれの心情、欲求、不満、相克・葛藤など極めて個人的な心理的問題を整序していく状況を記述し、解釈を行なった。そして、こうした過程を通じて、Umbandaや沖縄シャーマニズムの文化的パラダイムがそれぞれの主体によって再解釈されていき、その結果として、主観的で個性的な呪術宗教的世界が創造されていくことや〈個性化のプロセス〉は決して完了済みのものではないという特徴をもっていることを、詳細な事例研究を通じて指摘した。

第8章「二重の宗教世界－憑依カルトとユタグトゥの並存－」では、Umbandaの枠組に準拠してMedium(霊媒)となり、その後、救済を求めてやってくる依頼者の転換(沖縄系人への)を条件として、カルトリダーとしての活動とともに〈ユタ〉としての活動も行うようになった、一人のユタ的霊能者（信子）の呪術宗教的世界に関する民族誌的記述を行った。このユタ的霊能者の成巫過程に関しては第6章においても記述したが、本章においては沖縄系人を中心とする憑依カルトの組織化、カルトへの関与者（Medium、憑依霊、一般参加者）、中心的儀礼であるセッソン儀礼や中核的憑依霊である黒人奴隷の死霊Pai Joao霊の〈誕生Festa〉、セッソン儀礼の中で実施されているConsulta（診察）と呼ばれる呪術救済活動などに関して詳述した。その後、ユタ的領域の活動を、ハンジ活動と主要儀礼・呪法、そこに認められる災禍論などを通じて記述、考察し、最後に、こうした二重の宗教的世界を、それぞれの領域の災因論、解決のモチーフ、使われる憑依イディオム、個人名の使用状況、人間観などの指標から整理し、カルト領域とユタ領域を不断に往復することによって、全体として《沖縄系ブラジル人》という主体・アイデンティティが構築されていくと解釈した。

第6章で概観されたユタ的霊能者の呪術宗教的世界は、第8章と第9章において、それぞれ詳述されている。第8章では1940年代末から50年代初頭に〈ユタ〉化したブラジル型－節合型の信子の活動を事例研究として取り上げたが、第9章では1980年代以降に〈ユタ〉化した洋子、マリア、節子、栄徳を主に取り上げ、儀礼、災禍論、他界観などを通じてその呪術宗教的世界の特徴を考察した。

第9章「ユタ的霊能者の世界－儀礼・災禍論・他界観－」では、まず洋子の年間活動と主要な儀礼・呪法を記述し、その後、マリアのお正月拝み－十二支マーイ（廻り）－Novenas儀

礼、節子（とウガンサーである夫のパウロ）による〈集合的な拝み〉を詳述した。そして、その後、ユタ的霊能者の呪術宗教的世界の特徴を、①ブラジルのカミ（聖域・聖所）の創造、②ヨソガミとの関係、③Aparecida聖母の位置と意味、④災因の二重性、⑤他界観という観点から整理し、考察した。これらの特徴は、ユタ的霊能者の呪術宗教的世界のハイブリッド性、シンクレティック性を示すものであり、このハイブリッド／シンクレティック戦術に基づいた「新しい伝統の創造」が個性的主観的に行われていることを指摘した。

各ユタ的霊能者は、個性的主観的な呪術宗教的世界を創造しているのであるが、その一方で共通する側面のあることも指摘した。それは、災禍論の二重性に端的に現れているように、一方において、沖縄的災禍（の解釈）を通じて、父系系譜関係や社会的な規範などを通じて、依頼者を沖縄的コスモスの中に定位させることで、そこに沖縄との連続性を保証しながら〈ウチナアンチュ〉という主体を構成し、他方、ブラジルの災禍を通じて「ブラジルに居住する」沖縄人やブラジル人(二世)という主体を構成していく共通の営為であることを指摘した。

第10章「Utina Press紙における〈祖先崇拜〉関連記事の考察」では、沖縄系コミュニティ内で、1996年2月から毎月1回ポルトガル語のみで発行されているエスニック・ジャーナルUtina Press（発行部数8千部）に掲載された祖先崇拜関連記事の内容を考察することで、沖縄系人が祖先崇拜や〈ユタ〉をどのように捉えているのかを考察した。この記事の考察から沖縄系人には、祖先崇拜を巡って二つの認識が存在していることが明らかになった。一つは祖先崇拜を沖縄の伝統、ヤーの〈伝統〉と捉える立場であり、もうひとつはそれを〈宗教〉と捉える立場であった。しかし、この二つの立場はいずれも、自らの〈文化〉として祖先崇拜を継承していくことの重要性を基礎している点で共通している。それは、ブラジル文化の中で文化化される沖縄系二世や三世が、祖先崇拜をカトリシズムとの類似性から解釈したり、心靈主義のイデオロムを用いて解釈しながら、〈沖縄系ブラジル人〉としての自己が出自を通じて獲得したと認識する文化を、どのように〈継承〉していくのかに関する意味を見出そうとしている営為であることを指摘した。

第11章「総括－要約と課題－」では、まず第10章までの知見を要約し、その後、現時点において祖先崇拜や〈ユタ〉化の過程がブラジルという国家に規制されながらも、国境を超えてトランスナショナル的な営為として行われている度合いが非常に大きくなっていること、この過程で、ユタ的霊能者への沖縄系人の依存は今後も継続し、そのハンジの結果として、国境を越えたかたちの問題原因の設定や解決法が提示されていくだろうこと、そして沖縄系人のエスニック・アイデンティティを立ち上げる上で重要な役割を果たしていくだろう点などを指摘した。しかしながら、現実的には、ブラジル側の判断（〈ハンジ〉等を通じての）をそのままのかたちで、沖縄側の親族が受け入れることはないし、逆に沖縄側の判断をブラジル側の親族が受け入れることもないという、いわば国境を越えた相克・葛藤の状況が出現してきていること、即ち、同じ血縁関係に基づいての祖先崇拜の実践は一方において、国境を越えた沖縄人の「連帯や協力」を生み、他方において「相克と葛藤」を発生させることになっている状況を指摘した。いわゆる「ユタ問題」もまた、グローバル化やトランスナショナル的状況の進行とともに、国境を跨いだかたちへと展開しているのであり、同じ血縁関係を持つ沖縄人が、こうした状況をいかに捉え、どのように解決していくのか、より一般的に言えば、グローバル化やトランス

ナショナル的な状況の中における人間の営為やアイデンティティのあり方、〈文化〉のゆくえを、追求していくことが今後の私たちに与えられた課題であることを指摘した。

論文審査結果の要旨

ブラジルの日系人人口のうち、沖縄県出身移民とその子孫たちは約1割（14万人程度）を占めるが、従来その経験は「日系移民」「日系ブラジル人」という範疇に括られて論じられてきた。本論文は、ブラジルの沖縄系人社会において活動する〈ユタ〉的霊能者の生成とその呪術宗教的世界に焦点をあて、沖縄系人のエスニシティとエスニック文化の創造過程という視点から考察したものである。論文は11章と補論から構成され、前半の第1章から第4章までは理論的考察並びに歴史的背景の分析、後半の第5章から第10章までが、現地調査による一次資料の提示と分析に当てられている。

第1章はエスニシティについての基本的視点、即ち少数マイノリティが、国家の主流をなすマジョリティに対して自らを差異化しつつ、過去との連続性に新しい意味を付与することを通じて、新たな主体やアイデンティティを構築するという視点を研究史的に位置づける。そしてユタ的霊能者を巡る諸現象の中に沖縄系人アイデンティティの操作と創造の営みを探るための調査方法を論述する。

第2章～第4章では、沖縄系移民をめぐる内外の状況を歴史的に分析し、現状分析のための背景を整理している。まず第2章はブラジルの宗教状況を概観する。①呪術的聖人信仰を中核とする民衆カトリシズム、②インディオやアフリカ系住民などのマイノリティのシンクレティックなカルト、③フランスから導入されたKardecismoを中心とする神秘主義思想や心霊主義思想が醸成する呪術的大衆宗教、の混合のうえに、1960年代以降カトリシズム・ヘゲモニーの終焉により多様な宗教的ナショナル・アイデンティティの構築が可能な状況が出現したと整理し、これが沖縄のユタに由来する信仰と親和的な環境を形成したことを示している。第3章では日系人社会の歴史を回顧し、初期の農村地帯への短期的出稼ぎから滞在の長期化、さらに離村向都時代をへて都市での永住に伴う生活の再編という展開を追う。これらにより沖縄系人社会をブラジルの歴史的社会的文脈に位置づけつつ、日本的宗教がブラジルへの定着を選択した人々の新しいエスニック・アイデンティティのシンボルという意味を獲得する過程が跡づけられる。そして第4章では、日系移民のなかでも、本土系移民とは別の地域に形成された沖縄系人の居住地が1950年代以降に沖縄系エスニック文化創造の〈場〉となったこと、1970年代に、本土系日系人との明示的な差別の消滅、ブラジル社会における同化主義イデオロギーの脆弱化、沖縄・日本本土・米国などにおける沖縄固有文化の見直し運動の影響などを通して「沖縄人であること」のスティグマが払拭されると、新たなウチナアンチュ[沖縄人]・アイデンティティが表面化し、そのシンボルのひとつとして祖先崇拝が選択されるようになったという歴史的展開を跡づける。そしてこれが祖先崇拝を職掌の中心とするユタ的霊能者誕生の背景となったことを指摘する。

第5章ではサンパウロ市Vila Carrao地区に形成された沖縄系コミュニティで実施した宗教慣習調査により、①圧倒的に多くの家庭で〈沖縄の固有宗教〉と観念される祖先崇拝が実施されていること、②祖先崇拝とカトリック信仰などの併存という信仰の二重性がみられ、沖縄の

祖先崇拜を〈ヤー[家]の宗教〉〈沖縄の習慣〉、その他の宗教を〈個人の宗教〉〈ブラジル人としての宗教（カトリック教徒の場合）〉と位置付けている点で、沖縄性と日本性、ブラジル性とが宗教的に整序されていること、③ユタ的霊能者への依存が非常に高く、運勢や吉凶判断、祖先祭祀を中心とする儀礼・呪法の執行依頼、沖縄的な供養のやり方の教示、異常体験の解釈、先祖の意向の確認などが行われていること、④ユタ的霊能者と並んでブラジルの霊能者 Curandeiro への依存も高く、相談する問題の内容を沖縄的なものとブラジルのものに整理して相談相手を選択していること、などが解明される。

次の二つの章では 9 人のユタ的霊能者の成巫過程に焦点を当てている。第 6 章では成巫過程で準拠した宗教伝統を指標としてブラジル型と沖縄型に大別し、さらに沖縄型を伝統志向型（他の宗教を排除する）と融合志向型（他の宗教信仰の要素を取り入れる）に分類している。沖縄・伝統志向型は成人してから移民し、その後霊能者になった者にみられ、ブラジル型と沖縄・融合志向型はブラジルで成人した霊能者（子ども時代に移民した準二世およびブラジル生まれの二世）が該当するという主体のアイデンティティとの対応が見られること、しかしいずれもブラジルの宗教との関係を整序しつつ宗教世界を構築している点で、ブラジルという国家の中でのエスニックなユタになる過程であることが示される。他方、第 7 章では成巫過程の個別的検討を行い、個々の霊能者が、沖縄シャーマニズムの文化的パラダイムに準拠しつつも、自己の状況をそれぞれ主体的に解釈しつつ個別の宗教世界を創造しており、その過程は常に進行中であって完了しないという特徴を指摘している。

次の二つの章は、4 人の霊能者の呪術的宗教世界の分析に当てられる。第 8 章では、1940～50 年代にブラジルの呪術的カルトのなかで霊能者となった女性が、やがて沖縄系移民依頼者との関わりのなかでブラジルの呪術儀礼領域とユタ的活動領域という二重の宗教世界を形成し、その間を往復することによって〈沖縄系ブラジル人〉という主体を構築する状況が詳述される。第 9 章では、80 年代以降に成巫したユタ的霊能者 3 人の宗教世界を分析し、沖縄シャーマニズムのパラダイムの中へのブラジルの聖域・聖所の組み込み、ブラジル民衆カトリシズムに現れる聖母アパレシーダの位置づけ、沖縄的災因とブラジルの災因の整序などハイブリッドでシンクレティックな「新しい伝統の創造」がみられることを指摘した。いずれも沖縄との連続性を保証しつつ、〈ブラジルに住む沖縄人／沖縄系ブラジル人〉という主体を構成する共通の営みであることに注意を喚起している。

第 10 章では、Utina Press というポルトガル語のエスニック・ジャーナルに掲載された祖先崇拜関連記事の内容を分析し、沖縄系人のなかに祖先崇拜を巡って二つの認識－祖先崇拜を沖縄の伝統／ヤーの伝統と捉える立場と、それを宗教と捉える立場－があることを述べつつ、いずれも自らの文化として祖先崇拜を継承していくことの重要性を強調するという共通点があることを指摘する。それはブラジルの中で文化化される二世や三世が、祖先崇拜をカトリシズムとの類似性から解釈したり、心霊主義のイディオムを用いて解釈しながら、沖縄由来の文化を〈沖縄系ブラジル人〉としてどのように継承していくのかに関する意味を探る営みであると解釈する。

最終章第 11 章では、第 10 章までの知見を要約した後、現時点において祖先崇拜をめぐる現象が国境を超えてトランスナショナル的な営みとして行われていることの意味を考察する。即ちユタ的霊能者が成巫する過程で沖縄に帰還すること、そのような霊能者に沖縄系人が依存し続け、その結果として、国境を越えたかたちの問題原因の設定や解決法が提示されていること、

それが沖縄系人のエスニック・アイデンティティにとって重要な役割を果たしていること等である。しかし沖縄系ブラジル人の解釈と、沖縄に住む彼らの親族の解釈の間にはズレが生じる。その結果、同じ血縁関係に基づいての祖先崇拜の実践が、一方において国境を越えた沖縄人の連帯や協力を生み、他方において相克と葛藤を発生させることになっている状況を指摘する。

こうしてユタ的霊能者と沖縄系ブラジル人社会の研究にとって、グローバル化やトランスナショナルな状況の中での人間の営為、アイデンティティのあり方、そして文化のゆくえを追求することが、新たな課題として提起されている。

本論文は、移民社会における宗教現象を対象としているが、それが単なる本国からの文化継承ではなく、移民先の社会の文化や歴史との相関のなかで、新たなエスニック文化として創造されるものであるという理論的主張は明快かつ説得的である。近年のエスニシティ論を踏まえ、歴史的考察と実態調査を組み合わせを行った繊細な事例分析は高く評価される。従来、日系移民として一括して扱われてきた沖縄系移民について、その独自の社会的・文化的状況に焦点を当てたことは、移民研究に対して重要な寄与をなすものである。現象のグローバルな文脈への展望は、現代社会科学の重要な課題との接点を明らかにしている。一部の用語についてなお統一や調整の必要は残るが、長期にわたるフィールドワークを通して得られた膨大かつ詳細な情報が民族誌としての高い水準を支えている。

以上のように、本論文は、文化人類学および移民研究のみならず、現代社会科学の発展に寄与するところ大である、と評価することができる。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。